

# 朋友だより

今年初めての朋友だよりをお届けします。  
大田堯先生の自撰集成 を感動を持って読みました。  
今回はそのさわりの部分をご紹介します。人間の持つ柔軟性・  
可能性の偉大さに想いを新たにしています。  
ご参考になれば幸甚です。

2014年2月

(有)コンサルタント朋友  
代表取締役 奥長弘三



## 大田 堯 自撰集成

『生きることは学ぶこと - 教育はアート』を読む



### 学習と教育

大田堯先生の自撰集成『生きることは学ぶこと - 教育はアート』(藤原書店 2013年11月)を読みました。最初に学習と教育の関係について、同書に収録されている「生きること、学ぶこと - そして私たちはどう生きるか」(同書 P.23 ~ 47)の文章から見てみます。学習がより本源的なものであり、それを助けるのが教育であることがわかります。

みなさんのお子さんは子宮の中で「異物」として育ち、そこを抜け出て、お母さんをなめたり、さわったりしますよね。人間は生まれたときから、学びがはじまっているわけです。ですから学びというものを学校教育の活動の一部というように矮小化して考えるはいけません。そんなちっぽけなものではないですよ。受精卵が子宮に定着したときから、自発的な成長発展を遂げ、生まれてからも、自ら育っていくという学習能力があり、死ぬまで学習が続くのですから。(同書 P.41)

子供一人ひとりがそれぞれ新鮮でユニークな設計図を持っているのですから、それを助けるというのが「教育」ということです。(同書 P.42)

### ヒトの持つ柔軟性・可能性

次に同書に収録されている別の文章「ヒトの子育てについて」(同書 P.99 ~ 140)から、他の生物と比較した人間の特徴を見てみます。最近の生物学の進歩もとり入れた興味深い文章です。長い引用が続きますが、出来る限り忠実に著書を再現します。

ヒトは他の霊長類と比べても弱いものとして生まれるのが特徴です。

ヒトの新生児は10ヶ月の妊娠期間に加えて、さらに一年間胎内にあって、身体各部のバランスもとのえ、生まれると同時に大人にほぼ似た行動様式をとることが出来、言語発声能力を持って生まれ出るべきはずのとき

ろ、一ヵ年間早く母体から離れてしまう、一年早産だというわけです(P.117)

何故ヒトは一年早産なのかというと 新生児が直立歩行できるまでに一年かかること及び言葉をしゃべるまでに一年かかるからと言われています。

このようにヒトは「未熟」の状態で生まれるのですが、このことは他の動物に備わっている、特殊な環境に対する特殊適応の形成(特殊化)をつくり上げる時期を遅らせることがふくまれます。北極熊やライオンはそれぞれ生まれた環境に適した身体を持っていますが、ヒトは裸のまま生まれてきます。このことがヒトの持つ柔軟性、可能性を大きく高めます。

ヒトは「身体の外側に道具を持つ」存在と言われる。それは人間の新生児が他の動物が備えている一定の固定的な環境に適応するような特別の身体器官を持って生まれてこないで、むしろ社会的遺伝ともいべき文化が個体の外側に長年にわたってたくわえてきた「道具」を手づらで裸ん坊のまま生まれ出て、使いこなして生きる動物だという意味なのです。(P.120)

動物は自分が成長した地域、自分が適応した地域に住みついている。しかし人類は特殊化の度合いがきわめて低かったので、地球全体に広がることができた。肉食、草食、混合食など食事のレパートリーもきわめて広く、かつ個性的で行動も歩き、走り、登り、泳ぐなど広い選択の中に生きることができのです。(P.121)

### ヒトの生命力 - 与えられたものと

生まれた後で獲得するもの

ヒトに限らず、この地球上の生きとし、生けるものはしなやかで、したたかな生命力を持っています。その生命力は生まれたときに与えられたものと生まれた後で獲得するものに分けられます。与えられた生命力は 遺伝子によるものと 生まれたときの環境から成り立ちます。

おそらく他の動物のばあい、この与えられた生命力の枠組みの中で生涯を終えると考えられます。(中略)それに比べてヒトは格別に広い適応能力を持っていることになります。(中略)この適応力は与えられた遺伝子と与えられた環境の枠組みをはるかに抜け出ているようにさえみえます。このヒトの持つユニークで広くかつ多様な適応能力を説明するには与えられた生命力に加えて、もう一つの生命力を考える必要があるようです。(P.128~129)

そのもう一つの生命のことを、生まれた後で獲得する生命力といっておきたいと思えます。そしてこの生命力の働く生理学的根拠を他の生物に比べて格段の発達を遂げたヒトの脳に求めることになると思うのです。発達した脳はどんな機能を持つと考えるのでしょうか。(中略)ヒトは象徴(シンボル)を操作する動物といわれます。その基礎にあるものは選ぶ力、選択能力、ないし高度な識別能力です。(P.129)

人はシンボルを選びながら、操作して行動するという他の生物には見られない行動能力を、定型的な生得的行動様式を退化させることと引きかえに獲得していき、ほぼ終生にわたってその生命力を発展させることができることになったのです。そうはいつても、この選択能力は、その人その人の内発性にゆだねられており、従って旺盛な選択力を発揮する人もあり、そうでない人があって不思議ではありません。一人ひとりが、ユニークにその気になって(内発的に)その獲得的生命力を行使する、つまり選びながら自分なりの個性を創造して行くのです。(P.133~134)

彼が選んで生き、自らをも創り出す場としての社会は、自然環境の上にかなり強引につくりあげられた既製の文化、社会いわば人工的な社会なのです。その文化、社会の持つ人工マニュアルの中をそれぞれの流儀で選びながら生きるのです。なんでもできるというような恣意的自由の世界ではむしろありません。それでもしよせんは自らの意志によって生きるほかはないのです。(P.137)

## 現代の日本・世界を考える

私達は与えられた「社会的文化的環境」の中で学習をくりかえしながら、自分なりの個性をつくり上げています。しかも私達は与えられ

た社会的文化的環境を単に与件として受け入れるだけでなく、学習を通してこの社会的文化的環境を自分達にとって、より良いものにする方法を身につけます。

ここで改めて私達の住む社会的文化的環境としての現代日本および世界について、今までに小生なりに学んできたことを整理して見ます。

1 .20世紀から21世紀に入り世界は大きく変化しました。戦争の世紀から、話し合い和平の時代へと進んでいます。植民地支配から解放された新興国の発言力が増し、先進諸国だけで物事が決まる時代は過去のものとなりました。この動きを象徴する出来事が2013年のシリア問題に見られます。10年前にはアメリカは国際世論の反対を押し切って、イラクへの武力攻撃を強行して、泥沼におち込みました。2013年のシリア問題では武力ではなく、話し合いでの解決が模索されています。人類の英知の前進が見てとれます。

2 .政治の面での大きな前進に比べ、経済面での立ち遅れが目立ちます。新自由主義にもとづく、市場原理主義がまかり通り、グローバル企業優先の状態が続いています。

しかし経済の面でも、新しい芽が生まれはじめています。1%の横暴に対して99%の人達が声を出しはじめています。また新しい雇用の担い手、持続可能社会の担い手としての中小企業への期待が高まっています。日本各地の自治体で中小企業振興基本条例の制定が進んでいることは大変頼もしい限りです。(2013年12月26日現在、29道府県、114市区町)

大田先生の文章にあるように人間の持つ柔軟性、可能性を発揮し、そして人類の英知を結集して、人間が住むに適した社会にしたいものです。



